

授業研究



問題の提起・造形科

美の認識を更新することで

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる

カリキュラムの連動を磨き、学校の教育力を高める

〈抽象に着眼して〉

広島大学附属小学校教諭 芦田 桃子



はじめに

本校の研究主題「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」に対し、造形科では、芸術教育のその先に、「日常の中にある人や自然の（新しい）美しさやよさを見つけ、大事にしようとする（心が育った）姿」を設定している。自分の認識の外側に、未知であり異質である〈他者〉を発見した時に、新たな価値を見出し、新しく受け入れたり、楽しんだり、好きになったりすることは、人生を豊かにすることにつながるだろう。これらを実現するために、授業開発及びカリキュラム構想に取り組んできた。

本実践は、令和6年7月に行った校内授業研究会にお

ける授業発表及び事後協議会、児童の姿や作品、記述等を元に研究主題にせまる価値変容の事実を明らかにすることを目指す。また、カリキュラムの有意義な連動を実現するために教科間の連動性を意識した題材開発を進め、授業後の協議会では、研究主題の評価に関して助言を賜ってきた南浦涼介先生を講師として招聘したことがこれまでにないスタイルとなった。各教科における実践成果を積み上げながらも、教科の枠で分断されない学びの連動性を実現しようとする私たちの地道な歩みの一つであると言える。

二 主題について

（一）美の認識を更新すること

カント¹が、美とは事物の中にあるのではなく、事物を美しいと判断する人間の認識能力の働きの中にあると考えたように、時代や文化の違いなどによって美の認識は変化するものだと考える。造形科授業において、これまで美しいと捉えられていなかったものに対し、新しく美を見出す活動は、認識外の〈他者〉を否定・排除するのではなく、自己の認識を更新することで別の向き合い方をするにつながると考える。そこに新たな価値を見出し、新しく受け入れたり、楽しんだり、好きになつたりすることが、〈他者〉を楽しみ続ける姿につながっていく。

（二）カリキュラムの連動と学校の教育力

本校のように小学校での教科担任制は、各教科の専門性を深めることによる内容の充実を図れる一方で、各教科の学びの統合や関連付けを児童に任せるだけでは十分と考え、他教科とのカリキュラムの連動性を意識し、教科で分断されない学びの連続性を意識する研究推進方法を探った。

（三）抽象への着眼

筆者の、「具体的に分かりやすいこと」がよしとされやすい最近の風潮に対する疑問視と、それが「分からないうものへの怖れや否定」を生み出しているのではという批判から、よく分からないもの、美と認識していなかったものの一つとして抽象表現に着目し、認識の更新を目指してこれまでも様々な学年での授業開発を行ってきた。その人なりの感じ方や捉え方が含まれる唯一性や曖昧で時に不思議さを感じるような表現の中にある物事の本質やその人の本心があるという抽象表現の特徴は、〈他者〉の魅力につながる部分があると考えた。

（四）「ヒロガルシート」の取り組み

校内では、児童の学びや〈他者〉を楽しむ姿を見取る方法として、ナラティブ評価²に着目し、個々の文脈で学びを振り返ることのできる「ヒロガルシート」を開発し、取り組んできた。本授業についても、本シートへの記述を元に児童の学びを見取る。

三 授業の構想

（一）単元「詩と版画」

〈重なりやくり返しを味わって〉（第六学年）